

## 水は命の源

天理市立福住中学校 二年

大東 風生

暖かくなってきて、部屋の窓を開けると、川のパチャパチャとした音が耳に入ってくる。家のすぐ裏にあるその川を見てみると、低学年のころ、川遊びをしたことを思い出す。あみを持ち、長靴をはいてゆつくりと川に足を沈める。けれど、遊んでいると、いつの間にか長靴に水が入ってしまう。そうなる。最初は、水が入らないように、静かに歩いてきたのに、「もういいや」と思い、最終的に長靴の意味はなくなってしまった。温かい机にひんやりとした川の水がふれると、夏特有の感じが味わえる。水の入った長靴で歩くのは少ししんどい。けれど、遊んでいる時は、その疲れを全然感じない。川の水は、太陽の光が当たっていて、キラキラと宝石のように輝いていた。手のひらくらいのサイズの小魚が川の流れに逆らうようにして泳いでいた。川

遊びは、とても楽しかった。

しかし、祖母に、

「この川の水に、おむかいの家のトイレの水も混ぜてるから、口に入らんようにしなさいや。」

と小学三年生ぐらいの時に言われ、幼い私は、川の水とトイレの水が混ざるのを想像して、それ以来、川に入らなくなった。

そしてある日、ボーツと川をながめていると、水ではない、丸いまくのようなものがある。流れてきた。上流には、機械の修理を行っている店がある。

「これ、何。」

と私は父に聞いてみた。

「機械の油やろ。」

と父は言っていた。私は、流れていくのをじっと見送った。すると、遠くに家族連れで、

つりをしている人たちが見えた。

「何つつとんのやるな。」

と父は言った。確かにと思いつながら、ながめていた。しばらくして、何気無く、その家族のいた所に、散歩ついでに行ってみた。そこで私は、とても残念な光景をみた。ジュースの缶、犬の排泄物がそのまま放置されていた。家族で遊びに来るのは、かまわないけれど、自分たちの出したゴミは片付け、もとのきれいな所にして帰るのが常識ではないのかと思つた。犬の排泄物をきれいにするのに、水をいっぱい使つた。祖母が、ホースを使つて、そうじをしているのを私は、ただ見つめていた。

もし、自分が家族と一緒に、どこかへ遊びに行ったときは、その場所を、自分たちが来たときと同じようにきれいにしてから帰ろうと思つた。

川が、人の手によって、だんだん汚れていくのは嫌だ。私の家の近くに、天然水のおき出ている所がある。その水は、澄んでいて、夏に飲んでも冷たく、のどをうるおしてくれ。水がないと、私たちは死んでしまう。水

は、命の源。だから、源という字には（さんずい）が付くのかなと、幼いときから思つていた。

私の家の裏の川も、きれいになつてほしい。私にも子供ができたなら、一緒に入つて遊びたい。けれど、川が汚ければ、大事な子供を、川にいれるのは、抵抗がある。天然水も、いつまでもあり続けてほしい。

この作文を書いていて、今まで忘れていた幼いころのいろいろなことを、たくさん思い出せた。水は、命の源。地球は「水の惑星」。その水が、汚れたり、なくなったりするのはとても悲しい。きれいな地球が、一番いい。









